會報

昭和十年九月 | 49 | 日本山岳會

Hon. C. G. Bruce
"HIMALAYAN WANDERER"

島田巽

「ヒマラヤ二十年」を著したブルース將軍が、其後（一九一〇年以後）のクル・ラホール紀行、大戰出征、エヴエレスト第二回遠征等の回想を附加して、將軍のヒマラヤ生活三十餘年を語り盡した好著である。

×

ブルース將軍とヒマラヤとは何か前世の緣と云つたやうな關係を想はせるが、將軍のヒマラヤ熱愛は單に運命的な偶然のものではなく、强い意思から生れたものであることを知つて一層尊敬の念が高まるのを覺える。既に十二歲の頃からインドに憧れ、インドに赴いて後、父君から本國の聯隊へ歸任をすゝめて來たのも顧ずグルカを志願したあたり一貫した愛著が見出される。

×

この書の面白味は色々あるが、就中面白いのはヒマラヤ遠征家達の橫顏がブルース將軍によつてスケッチされて居ることだ。

將軍は周知の通りコンウエイのカラコラム遠征に參加し、マンメリーコリー等とナンガ・パルバットを目指し、又ロングスタッフ、マム等のガールワル探險を行ひ、ドッドと共にクル・ラホールを步く等高名な登山家達と行を共にして居るので、ヒマラヤ登山史の側面を見て居るやうで實に興趣を感じる。

又この記錄を通して如何にこれらのヒマラヤを目指した人々にとつて、ブルース將軍が必要缺くべからざる存在であつたかが了解される。コンウエイの時にはむしろ將軍の方から頼んで一行に加へて貰つたのが次第に逆になつて其後の遠征隊には懇請されて一行に加はるといつた調子になつて來た。いづれにしろ將軍が如何に犧牲的精神を持つて、これらの遠征隊を援助したかが了解されて、大きな樣の下の力持ちとしての存在に感心せずには居られない。

×

だがこの努力が結局エヴエレスト第二回遠征隊長として光輝ある高名を馳せ、更にヒマラヤ時代を現出せしめたとも云へるだらう。

「私は他人の才能を發揮させるといふことにかけては相當の腕前を持つて居る。ことに探險や登山等で」と自ら云つて居り、曾て他の人々も折紙をつけた程のリーダーとしての性格に惠れた將軍の存在は、ちよつと羨望に値しやう。

×

將軍は大戰で負傷したが、その時醫師の宣告には

「ブルース將軍は歸國の上、靜かな規則正しい生活を送るべし」とあつた。で將軍は曰く、

「今迄の自分の生活が靜かであつたか否かは知らぬが、規則正しいものであつたことは確かだ。スキスのナシーズン、ヒマラヤへの三回の訪れが充分それを證明して居る。わが懷しい醫局よ、君は何と愉快なことを云つて呉れたらう。若し君のこの宣告がなかつたら僕はエヴエレスト遠征なぞといふ法外な幸福には廻り合はなかつたらう。僕は醫局の諸君にお禮を申上げる」

正に將軍の面目躍如たる氣焰である。

×

この書の最後を飾る HIMALAYAN WANDERINGS の一章は將軍の三十年間の經驗の結晶を批瀝したものであらう。

將軍はこゝで費用のかゝる大物日當てよりも、ヒマラヤのより低い地方で本當のヒマラヤの山が充分に味はれることを說いて居る。將軍がクル・ラホール溪谷で試みたやうな形式のものである。

將軍は又ヒマラヤ遠征の資格は頑健な胃袋の所有者であるべきだと注意して居る。

その他ヒマラヤを目指すものにとつて體驗から語られた色々の資格なり注意なりが並べられて居るのには感心する。

イギリス人である將軍が、ヒマラヤへの理想的遠征隊としてバウワアのババリア隊を擧げて居るのも面白い。

×

面白いと云つて書き出したのでは際限がない。とにかくこの書の强味は三十年に渡る著者の大きな經驗の足跡だ。この太陽の前には、たかだか數年のたどたどしい山步きの記錄を繼めたといつたやうな本の價値は消え失せてしまふやうに感じられる。

ただこの本で殘念なのは挿入の寫眞版が大抵既に他で發表されたものであることだ。

第六十九回小集會報告

時日　九月十九日（木）
　　午後七時
場所　赤坂溜池三會堂
講演
　本邦氷河問題の回顧と現狀
　　岡山　俊雄氏

右の通り開催致しますから御繰合せ御來會下さい。

A Plant Hunter in Tibet. by F. Kingdon Ward. Pp. 317 Iorathan Cape, Ltd, 1934

田邊主計

著者は植物學者並に旅行家として知られてゐるが、その探險的旅行の數多いことは、『これは私のアジアに於ける第十二回目のビッグ・ジアニイである』と記してゐるのを見ても解かる。英國人名錄に據れば、それらの旅行は、西部支那及北東部西藏 一九〇九—一〇年)、西部支那及南東部西藏(一九一一—一三年)、ブルマ北東邊境(一九一四、一九一九及一九二六年)、西藏內部(一九二四年)、アサム邊境(一九二八年)、佛領印度支那橫斷(一九二九年)等のものであつて、左記の書物は卽ちその收獲である。

On the Road to Tibet, 1910
The Land of the Blue Poppy, 1913
In Farthest Burma, 1921
The mystery Rivers of Tibet, 1923
The Romance of Plant Hunting, 1924
From China to Hkamti Long, 1924
Rhododendrons for Everyone 1925
The Riddle of the Tsangpo Gorges, 1926
Plant Hunting on the Edge of the World, 1930
etc. etc.

本書に記されてゐる一九三三年の植物採集旅行は、三月はじめ Denning に始まつて、その年の十二月末同所に歸還する約十ケ月に渉るものであつた。卽ち、Assam より Mishmi Hills を經て、四月初め西藏最初の部落 Rima に達し、Sturgden Gompa から更に Salween 溪谷に到つて引還してゐる。この東南西藏旅行は七月中旬 Ata Kang で二人の同伴者と別れてから後約半歲の間は數人の人夫を伴つた全く單獨の旅行であつて、その間一人の白人種にも會はなかつたといふ事である。

旅行の主な目的は植物の採集であつたが、地理の研究も亦重要な目的であつた。事實、Rong Tö Chu (Rima の北方)から Salween までの間は今まで殆んど未知の地域なのであつた。植物の方面では、多くの知られてない花の發見、百にあまる新しい植物の種子を持歸へる事が出來たのであつた。

彼は Royal Horticultural Society 及び其他園藝家たちの出資を受けてゐたので、西藏の珍しい植物を英國に移植える事を樂しみに待つてゐるこれらの會の人たちに、種々の種子を持つて歸らなければならなかつたのである。

『種子の採集なんか何でもないだらう』と諸君は思ふかもしれないが——』と著者は書いてゐる。處が、なか〳〵困難なもので、探してゐる木がやつと見つかつても肝心の種子が蟲に喰はれてしまつてゐたり、風雨に失はれてゐたりする。又折角集めたものを不覺にも鼠にさらわれたりした事もある。

この本は植物の智識のある人が讀めば一層面白い事であらう。例へば苦心慘憺、一つの種子を見付け出す處がある。『……これが私の欲しいと思つて狙つてゐた三つの種子の內の一つであつた。あとの二つは Primula Szchuanica と dwarf Hornkshood とである』(二三八・九頁)と言はれても一向はつきりしない。しかし、一般の讀者にとつても、旅行記として、その隣所に現れる風景や住民の樣子が興味深く讀まれる。肝心の植物の事に關しては全く論じる事が出來ないから、奇麗な花 (Carmine Cherry) の描寫を一つ紹介して失禮しやうと思ふ。

『……これは凡そこの世にある花樹のうち最も可憐なものであらう。この一花樹の種子を求めるためにだけでも世の採集家たちは遠く東邦へ旅立つて悔ゆる處はないだらう。……(八十呎に垂々とする櫻の大樹に)濃紅色の蕾は房々と、優雅に、枝垂れてゐる有樣はちようどロケットから發射された紅色の星の飛び散らばつて樹全體を深紅の雲に包んでしまつたやうだ。殊に夕陽が枝々を透してさす時、この紅い花は白熱の光に輝いて一層素晴しい。』(四六・七頁)

長期の旅行を行ふ事のないものにとつては、斯樣な長い月日と長い道程の旅行は、その事だけにも魅力を感じる。『夏は早やこの溪谷に過ぎ去つてゐた』(二二四頁、『その日は典型的な秋の日だつた。四方の山々は霧に鎖され、細雨はビショ〳〵と降り續いてゐた』二四六頁)『アサムの森林地に近づいて、私を最も喜こばせたものは樹々に落ちる軟い雨の音であつた。このやうな音を私は隨分久しく聞かなかつた』二四四頁)『この晩い心地よく濕つたアサムの森林地を過ぎて、西藏人夫たちも、今までの寒冷な氣候に具へてゐた幾枚かの衣服を脫ぎ取つた』(二九三頁)

これらの短かい言葉の內に人々は時の「うつろい」を感じる。事實、彼は再び英國の地を踏むに當つて更に一歲の年齡を重ねるのである。

旅の最後の日(十二月廿八日) Denning に入る。朝からの二十一哩を歩いてゐるので相當疲れてはゐたがそこからは自動車の便があるので、Sadiya へ向ふ。滿月に惠まれて夜の十時に到着、まづ風呂に入るといふ處でこの旅行記は終つてゐる。この日彼は七十哩の行程を一日にがんばつたのであつた。彼の樣な「常習」旅行者でも心のせく思ひをしたのであつたらう。

この本には二十枚ばかりの寫眞が入つてゐて、そのうち數枚はなかなか美しい。たゞ、植物の寫眞が二頁に過ぎないことは物足りなく思はれる。

三段峽の危期

吉澤一郎

愛に三段峽といふのは廣島縣山縣郡戸河內町と同郡八幡村に亘る太田川上流蜿蜒四里の浸蝕峽の事であつて關東人には餘り知られて居ないが關西以西にあつては相當有名な名峽の一つになつてゐる。まづ笛吹川の上流東澤西澤を合せ之を一まわり大きくしたものと思へば大した間違ひはないと思ふ。去る大正六年秋其の境地か幾多の奇景怪勝を抱擁せる變化窮りなき一大峽谷である事が發見せられる迄は土地の者によつて「柴木奥」と稱ばれ到底常人の入る事の出來ぬ祕密境として一般からは遇せられて居つた。然るに三段峽の主とまで呼ばれ大恩人として敬慕せられてゐる熊南峰氏の私財を傾けての獻身的開發によつて其の天下の名峽たる事が一般に認められ大正十四年十月三重縣「赤目の瀧」と共に名勝に指定せられ禰來右保存法の庇護を享けつゝ互く人口に膾炙せらるゝ樣になつて來た。此の峽谷の特色をまづ左に列記して見やう。

一、岩容の怪奇雄大
二、樹木鬱蒼雅致に富む事
三、水態の變化著しく特に著名な

る瀑布多き事
四、景趣の神祕的なる事
五、紅葉の美の勝れたる事
六、珍奇なる植物に富む事
七、北邊に太古その儘の八幡高原を控へ、西南に幽玄なる山岳地帶（恐羅漢、十方山）及び奥三段峽を抱きて峽谷瀑布高原山岳を一括せる大三段峽を形成せる事
八、四季夫々の清興に惠まれたる事

又峽中の著名なる景勝を下流から擧げると

龍、口、五立、關附、天狗岳、黑淵、地獄谷、猿飛、二段瀧、三段瀧猪上ラズ、出合瀧、龍門、三ツ瀧、

等となり各々特色ある景觀を誇つてゐる。

然るに私が「三段峽の危期」と首記した所以のものは敏感なる讀者が又かと直感するであらう水電問題の突發である。峽谷と水電の問題は吾々は已に黑部溪に於て經驗してゐる日電と黑部の問題はどういふ譯か其の後すつかり鳴りをひそめて了つてゐる樣であるが中國の黑部たる此の三段峽のダム化は目下同地方の大問題となつてゐる。實は之は吾々にとつて遠く西の一地方の問題として對岸の火災視出來ぬ譯があるのである。それは內務省令中にある保存法の「許す事あるべき現狀の變更」なる精神を逆に惡用し之が許可を得た場合次々と第二第三の追願を爲し、當局者も亦五十步百步の故を以て之等を許可し遂には幾十萬年とも想像し得ぬ多くの星霜を經て初めて造られたる造化の一大藝術品たる天下の夕勝をば一朝にして荒廢卑俗見るにしのびざる慘憺峽と化し去るであらう事にあるのである。天然山水の風景美がその偉大なる力によつて身心の陶冶鍛鍊、學術上の貢獻等金錢を以て評價し得ざる多大の効果を齎す事實を知つてか知らずにか電力會社

第二回山岳懇談會

前號（第四七號）に豫告しました中央氣象臺の藤原咲平博士を中心とする懇談會は來る九月下旬に開催することに致しましたから右御出席御希望の方は前號にも申上げました通り

本會事務所內山岳懇談會係宛豫め御通知おき下さいますれば更めて時日會場等は決定次第お知らせします。

第二回懇談會世話人

彼等は先づ三段峽谷中の水利權を獲得した。そして徐ろに觀光道路と稱してセメント、バラス等を運搬するに必要なる自動車道路を企劃設置した、殊にダムの出來る黑淵まで立派な自動車道路を作り此のダムに來る遊覽客の爲めに屋形舟やボートを浮べるに便するといふ放言をも吐いてゐる。

次には地元町村民殊に役場の吏員や有力者の間に手を延ばして行く。勿論買收であらう、嘗つては同じ水電問題に對して犀をそろへて反對をした人々の中に會社の甘言に乘つて測量を援助しその他各種の便宜を與へやうとする者さへ出て來てゐる。會社側では少數遊覽客による收入よりもダム設置による稅金の方が餘程町村の財源になるといふのであらしい。洵に斯くの如き甘言にのつて會社の手先となつて動く者は只徒らに目前の小利に眩惑されて子孫永遠の利福を念とせぬ徒輩なりと言はざるを得ないではないか會社の橫暴はこゝに言ふ迄もない事であるが地元町民の中に小數とは云へ斯かゝる分子が潛在して居ると云ふ事は實に嘆はしい事と云はねばならぬ。

私は廣島に唯の一年しか在住して居なかつたのである。從つて三段峽に關しては悉しい智識を持つては居らぬ。然し同地所在の廣島山岳會の心である有志或は三段峽開發の恩人熊南峯氏よりの直接の御依頼をうけて同會々報、上記諸氏よりの私信を繼ぎ合せ前記の如き惡文をでつち上げて見た。從つて首題に似ず甚だ熱のないものになつて了つたが要する處、峽谷美自然美の禮讃者たる日本山岳會の會員諸氏に萬一の場合進んで此の三段峽破壞の阻止運動に參加せられ陳情書提出の如き場合には是非とも署名して戴き度いと思ふ事をまわらぬ筆に鞭打つて此處まで書いて來た積りなのである。

怎うか以上の樣な譯であるから拙文は拙文として有事の際に於ける會員諸氏の御援助を衷心より希望してやまぬ次第である。（終り）

會務報告

新着圖書

寫眞月報　八、九月號　小西六本店
登山とスキー　同　黎明社
野鳥　同　巢林書房
山小屋　同　朋文堂
ケルン　同　同
山　七、八月號　梓書房
地學雜誌　八月號　東京地學協會
稜線　七月號　下關山岳會
せふり　同　福岡山の會
旅行　八月號　東京旅行クラブ
みなかみ　同　奈良山岳會

泉ヶ嶽 八月號 七七銀行山の會
旅の趣味 九月號 大阪ミテコー會
旅路 八、九月號 關東旅行クラブ
獨立樹 同 東京山旅クラブ
奬健ワンダーフォーゲル 同 奬健會
山 同 横濱山岳會
黒木立 同 關東岳愛會
山彦 同 東京山彦山岳會
關東山岳會報 七月號
臺灣山岳彙報 八月號
白樺會報 同
日比谷山岳會報 同
京都山岳會報 同
峠の會報 同
奥高尾山岳會報 同
かゞりび山岳會報 同
ムサシノランプリング會報 同
日本アルカウ會報 同
大阪三品山岳クラブ報 同
關西健歩會報 同
東京アマチュア山岳會報 九月號
東京高嶺會報 同
八王子山岳會報 同
神戸白馬登山會報 同
魚市場山岳會報 七、八月號
日本登高會報 八、九月號
東京市山岳部報 同
廣島山岳會報 同
東京アルカウ會報 同
山人會報 同
名古屋山岳會報 同
東京登歩溪流會報 同
明峯山岳會報 同
がくれい會報 同

登仙會報 七月號
觀光 八月號 觀光社
山と喜世留 第一
The Geographical Journal July 1935
Mountaineering Journal June-Aug. 1935
Appalachia Aug.-S.pt 1935
Sierra club Bulletin June 1935
Trail and Timberline July-Aug. 1935
The Mountaineer Aug. 1935
La Mountagne Juin-Juillet 1935
Il. Alpinismo (Manuali del C A. I.)
Club Alpino Italiano Giugno-Luglio 1935
Club Alpino Ital'ano Giugno-Luglio 1935
Butlleti Del Centre Excursionsta De Catalunya Juny-Juliol 1935
Anuario 1934 Club Alpino Esp-anol
Unione Ligure Escursio:isti Giugno-Luglio 1935
Svenska Turistfo:eningens Tidning Juli 1935
Die Alpen Luglio-Agosto 1935

昭和十年七月十七日印刷
昭和十年七月二十日發行
發行者 額田敏
編輯兼印刷者 東京市芝區琴平町一(不二屋ビル) 逸見眞雄
發行所 日本山岳會 電・芝・一六四九番
廣告一手取扱 進恒社 電話・四谷・六五四番
多木印刷所印刷

新鮮・周到・豪華なる「山」の文献定本出づ！

山岳講座 八卷

*第一卷
積雪……黒田正夫
積雪期登山法……高橋健治
婦人と冬期登山……黒田初子
山の文學……深田久彌
山の案内（那須・日光・尾瀬）……町田立穗
（上越・上信境）……角田吉夫
（頸城山塊）……冠松次郎

*第二卷
山の氣象學……三浦榮五郎
降雪……中谷宇吉郎
冬期登山の食物……黒田初子
中央亞細亞 山と人……木暮理太郎
山岳に關する本邦文獻……清水忠雄 坂戸勝巳
山の哲學……辻荘一
山の案内（北アルプス）……冠松次郎

*第三卷
登山遭難史……瀨木三雄
登山の醫學……篠井金吾
山の寫眞……須賀太郎
山の活動寫眞……塚本閤治
歐洲の山と人……麻生武治
登山と極地探險……加納一郎
山の案内（四國の山・北川淳一郎）（九州の山・竹内亮）

*第四卷
地質と岩石……佐々保雄
氷河と氷河地形……今村學郎
登山の道具……西岡一雄
山の民俗學……高橋文太郎
山の文學……田部重治
山の案内（朝鮮の山・竹中要）（臺灣の山・沼井鐵太郎）

*第五卷
山岳地形……辻村太郎 岡山俊雄
溪谷地形……辻村太郎 岡田修
山の湖沼學……吉村信吉
地圖とその讀み方……黒田正夫
山の寫生……足立源一郎
山小屋……角田吉夫
山の文學……藤木九三
山の案内（白山……深田久彌）（近畿の山……高山三郎）（中國の山）

*第六卷
岩登り……桑田英次
ハインキング……茂木愼雄
山と天文常識……山本一清
婦人と夏期登山……今井喜美子

*第七卷
夏期登山の食物……黒田初子
山の文學……尾崎喜八
山の案内（秩父山塊……原全教）（八ケ岳・霧ケ峰・美原……深田久彌）（東京附近（富士丹澤の山）中央沿線……中村貞治）
夏期登山法……冠松次郎
山の植物……田邊和雄
山の昆蟲その他……熊澤誠義
山の鳥類……中西悟堂
米國の山岳と登山家……小島烏水
山の案内（南アルプス……山下一夫）（中央アルプス……黒田正夫）

*第八卷
總論及び登山の變遷……木暮理太郎
キャンピング……丹羽多嘉子
山の音樂……大田黒元雄 辻荘一
登山語彙……角田吉夫
山岳に關する外國文獻……松方三郎
山の案内（千島北海道の山……佐々保雄）（東北の山……安齋徹）

春秋・夏冬の山・山・山をあらゆる角度より描破展開す。執筆者は當代一流の權威揃ひ。貴重なる書下し原稿の魅力に見よ!!

【監修】木暮理太郎
高橋健治
【編輯】黒田正夫
角田吉夫
豫約募集
内容見本進呈

▲昭和十年十一月より十一年六月まで毎月一回刊行・全國書店にて取扱
▲菊判三五〇頁・アート刷寫眞十數頁挿入 每巻二圓・申込金不要・詳細は内容見本

東京 神田 駿河臺三
共立社
振替東京四六〇七四
電神田一五一八・二六二四